

戸田市新曾の富士信仰

― 本橋源兵衛『不二道開伝一字開御礼奉申上候』の影印と翻刻及び解題 ―

今井功一*

キーワード：富士講 不二道 『一字不説の巻』

【はじめに】

本稿は、戸田市新曾南の本橋家に伝わる『不二道開伝一字開御礼奉申上候』という資料を翻刻し紹介するものである。本橋家が現在まで所蔵している近世及び近代の文書類は、戸田市史編さんの過程で調査の対象となつて『本橋好家文書』¹⁾として目録化されており(戸田市史編さん室 一九七七)、本稿で紹介する『不二道開伝一字開御礼奉申上候』はそのうちのひとつである。

「本橋好家文書」には、本資料と類似した表題と内容を持ついくつかの別の資料が確認されている。前述の『戸田市諸家文書目録』に記載されている「文書番号」「表題」「年月日」を以下に抜き出した。

- ・五〇 不二道開伝一字開御礼奉申上候 明治十一年五月二十六日
 - ・五一 一字開御禮奉申上候 明治十一年五月二十六日
 - ・五二 一字開御禮奉申上候 明治十二年五月十七日
 - ・五五 不二道一字開説 明治十二年七月二十五日
 - ・五七 不二道一定開説 明治十二年九月三日
- 以上五点がそれらであり、さらに、原本には表題の記載も年月日の記載もないが、目録上には
- ・八一 不二講一字開御礼奉申上候 明治 年月日不明

と記されたものがある。

本稿ではこれらのうち最も早い日付が記された文書番号五〇『不二道開伝一字開御礼奉申上候』を紹介し、本橋源兵衛の富士信仰及び新曾のいまいこういち：戸田市職員

(二八〇五)年(明治二二(一八八八)年)は、江戸時代の終わりの北足立郡新曾村(現在の戸田市大字新曾を中心とした地域)の名主として知られる人物である。「源兵衛名主」と呼ばれ親しまれていたとい、明治時代前半においても引き続き新曾村の指導者としての役割を担っていたことが分かっている。また、「本橋源泉」あるいは「本橋孝光源泉」と号して文化的な活動を展開する人物であったらしい。具体的な活動としては、北足立郡域の人々による『足立坂東百不動尊順礼歌』の刊行に係わつたことが知られている。新曾地域の富士信仰のリーダーとしての役割も担っていたと考えられ、本橋家にはそれを示す複数の資料が伝えられている。本稿で紹介する『不二道開伝一字開御礼奉申上候』とそれをベースに整理された『不二道一字開説』が特筆される資料として挙げられる。とりわけ『不二道一字開説』はそのタイトルでの出版を意図して執筆されたものであった。

「本橋好家文書」の他、本橋源兵衛と富士信仰を結びつける重要な資料の一つが、本橋家が現在も管理している「新曾浅間社」であろう。新曾村はいくつかのホラと呼ばれる単位に分かれており、新曾浅間社はそのうち新曾下ホラの氏神のように扱われ敬われてきた。かつてはこの新曾浅間社で富士講の月拝みが行われていたという(戸田市編一九八三)。本橋家と道路を挟んで鎮座する新曾浅間社の敷地は、平成二六(二〇一四)年現在では運送会社の倉庫とマンションに囲まれたごく狭隘なものとなっている。所有者である本橋三幸氏によれば、かつては広大で年を経るごとに縮小されたものだという。敷地の入口には「明治十三年同気再建」と書かれた供養塔、平成一八(二〇〇六)年に再建された石の鳥居がある。二つの大きな建物の隙間を縫うように石畳が敷かれたこのごく短い参道の奥に三間二間の拝殿と柵に囲われた本殿を有している。戸田市教育委員会編『戸田市の神社』には以下の通り記載がある。

「一〇 浅間社
所在 戸田市新曾南一丁目五番一五号

富士信仰を考える足がかりとしたい。『不二道開伝一字開御礼奉申上候』は縦二七、八cm×横一九、六cm、五丁の袋綴じ縦帳で、本紙と同じ料紙を用いた紙縫りで綴じられている。著者の本橋源兵衛は『不二道一字開説』という冊子の版行を企図したことが知られており²⁾、おそらく、手書き資料である文書番号五五番『不二道一字開説』や、文書番号五七番『不二道一定開説』³⁾がその直接的な原稿となったものであろう。明治十一年五月二十六日から明治十二年九月三日の一年余りの間に著されたこれらの資料の内容の比較検討及び本橋源兵衛の富士信仰の変化の考察については別の機会に改めることとし、本稿では資料の紹介にとどめたい。かつては単に「富士講」としてまとめて論じられがちであった様々な信仰集団について、全国各地で行われた自治体史の編纂過程で発見、紹介された諸資料によって、その信仰の多様さが明らかになってきている。大谷正幸は、これらの諸資料による研究を元に、ある種の富士信仰の体系を「角行系宗教」³⁾と名付け、多様な信仰集団を時間的な広がり、空間的な広がりをもつていくつかの類型に分類した(大谷 二〇〇四)。こうした議論の延長線上に、戸田市内で行われている富士信仰もあると筆者は考える。戸田市内でかつて行われ、今も行われている信仰を富士信仰全体の歴史の中に位置づけるための材料としたい。

本橋源兵衛と新曾の富士講

『不二道開伝一字開御礼奉申上候』の著者である本橋源兵衛(文化二

祭神 木花佐久夜毘売命(このはなさくやひめのみこと)

管理者 本橋 好

氏子数 なし

祭日 七月一日

〔沿革〕

管理者の五代前の文蔵氏が材木屋を営んでいた時代(約一五〇年前)に創建されたと伝える。不二講の人々により信仰されていた。

〔建造物〕

本殿 木造一間社流造 銅板葺

拝殿 木造三間二間入母屋造 銅板葺

創建年代は明らかになっていない。『新編武蔵国風土記稿』には新曾村の社寺としていくつもの神社仏閣が列記されているが、浅間社や富士信仰に関連するものは見当たらないため、近世も終わりのころの創建ではないかと推定される。

また、供養塔については『戸田市の石造物』(戸田市 一九七七)に二つの資料が以下の通り紹介されている。

「 浅間供養塔

(右) 同気 願主 春山文次郎(他一人)

(左) 明治十年 武蔵国足立郡新曾村

丑九月吉日 願主 本橋源兵衛

同 本橋文左衛門(他五名)

(台座には人名多数。正面の上部中央に山型、日月。右側の上部に二重丸に三の紋。)

「

浅間大神

入口

世 細野新左エ門
話 小山喜左エ門
人 (他五人)
本橋源兵衛 (他二人)

(左) 明治十一年寅四月 武蔵国足立郡新曾村

(裏) 本橋源兵衛 (他五人)

(正面上部に山型。右側の上部に二重丸に三)

ここに掘られている「同氣」は一般に言う「同行」と同義で、不二道の用語である。月三講は富士講のうちの一つであり不二道の用語を使うことはないはずであるが、新曾の富士講は不二道の要素を取り入れたものと思われる。本稿で紹介する資料のタイトルにも「不二道」とあるように、本橋源兵衛と彼の所属した月三講は、いわゆる富士講であったにもかかわらず、富士講とは別の角行系富士信仰の一派である不二道からの影響を多大に受けていたらしいことが、これら本橋家に伝わる諸資料から明らかになっている。

本橋源兵衛と富士信仰については、戸田市史編さんの過程でこれらの資料の存在が明らかになってから、戸田市史をはじめ複数の媒体で紹介されてきた。鳩ヶ谷市(現・川口市鳩ヶ谷)の郷土史家である岡田博が『郷土はとがや』誌上において、緑行三志こと小谷庄兵衛の弟子の一人である正行三五こと伊藤かつという女性を紹介する中で本橋源兵衛に触れたものが、これまでで最も詳細なものであろう(岡田 一九八二)。この伊藤かつを通して本橋源兵衛は、不二道の創始者である緑行三志こと小谷庄兵衛が筆写した『温智政要』を入手しており、これは現在も本橋好家文書のうちに伝えられている。尾張藩主であった徳川宗春(一六九六～一七六四)による『温智政要』は、富士講や不二道の人々が元祖とか中興の祖などと呼んで崇める富士行者である食行身祿(一六七一～一七三三)が彼の著作の中でその重要性を説いたとされ、不二道信徒たちにとっては特別な存在であった。鳩ヶ谷市教育委員会による鳩ヶ谷の古文書シリーズには膨大な不二道文書の翻刻が掲載されていることからもうかがえるように、不二道は、書物を伝える教団、とりわけ、筆写を繰り返すことで教えを広める教団であったといえる。これは、富士講の行者が、教義に関する文書を、その師事する御師から授与されることを基本とすることは大きく異なる点であると考えられる。地域の富士講の指導者である本橋源兵衛が、不二道の行者から彼女が重要視する書物を授

与されたことは、非常に興味深い。岡田はここで、『不二道一字開説』に触れ、「この人が明治十二年に版行した『不二道一字開卷』は、参行祿王伝書、小谷三志の不二道教典解釈、また、飯島万次郎の「極意秘想伝」等の内容そのままのダイジェストである。」と評している。

不二道の用語を用い、小谷三志の弟子とつながりのあったことが確認できる本橋源兵衛ではあるが、明治時代になると不二道の流れをくむ教派神道教団である実行教ではなく、富士講の糾合体である同じく教派神道教団の扶桑教に参加している。現在も新曾地区観音寺にある本橋源兵衛の墓石には「大講義本橋源兵衛」と彫られており、彼の死後に追贈されたものであろうが、扶桑教団における彼の地位を示している。

これまで本橋源兵衛は『戸田市史』などでは「富士講不二道の先達」と紹介されることが少なくなかったが、先達であったという記述について筆者は少々懐疑的である。富士講の先達とは各々の講のリーダーであり、富士登山を主導する役割を担う。ところが、先に紹介した石造物や本橋家に伝えられる数々の資料にも、本橋源兵衛の肩書として先達とされているものは見られない。また、通常、富士講の先達は「行名」と呼ばれる特別な名乗りを吉田の御師から許され、富士講に関わる際にはその名を名乗る。「日行青山」とか「菊行道寿」とかいった具合である。富士講のシステムは吉田の御師達によるであり、富士講のメンバーは、富士山に登頂回数によって御師から名乗りを授けられたり、信仰に関わる巻物等を受けられたりする。富士山に登頂するためには吉田で御師の宿坊に宿泊する必要がある。富士山に宿泊するところから御師の宿坊に決まっているので、何度登頂したかとは御師にとってどれだけの上得意か、ということと同義である。ところが、彼は先達を務めうるほどの回数富士山に登頂したのかについても、詳しい記録が残っておらず、本橋源兵衛が行名を名乗った形跡もいずれの資料にも見られない。筆者による当代御当主への聞き取り調査でも行名は伝わっていないという。先に列挙した本橋家所蔵の他の資料では、本名の本橋源兵衛ではなく「本橋孝光源泉」という名を名乗っている場合もあるので、この「孝光源泉」

という名乗りが行名である可能性もあるだろう。しかし、これも先に述べたとおり富士信仰とは無関係の場面でも源泉を名乗っている場合もあり、他地域の富士信仰資料にも孝光源泉の名は未見であるため、判断は保留しておきたい。とは言え、地域の富士講においてある程度の地位にあったこと、彼の所属する月三講においてリーダー的な役割を担っていたことは間違いないだろう。本橋源兵衛が、行名を名乗るような先達でなかったのであれば、どのようなリーダーだったのだろうか。筆者は、戸田市内で行われていた富士信仰の一群の興味深い実態を、本資料群が示していると考える。

『不二道開伝一字開御礼奉申上候』

先述の岡田は富士信仰研究会(現・富士山文化研究会)の会誌である『富士信仰研究』においても本橋源兵衛に触れている(岡田 二〇〇三)。この文章は、岡田が師と仰ぐ富士信仰研究家である岩科小一郎(一九〇七～一九九八)が生前に岡田に送った手紙を公開しているもので、そのうち一九七六年の手紙の一つに「一字開禮奉申上候」と題された明治二二年八月三日の日付を持つ冊子のイラストが記載されているという。ここでは、岩科による「表題に「一字」とありますが『一字不説』とは全く関係ない内容です」というコメントと、自身の「中容は小谷三志の影響にあるが、どうみても三志の思想の埒外というか独解である」という評とともに紹介している。

岩科のいう『一字不説』とは、富士講や不二道の人々元祖とか中興の祖などと呼んで崇める富士行者である食行身祿による著作の一つである。通称『一字不説の巻』を指す。『一字不説の巻』は食行による最初の著作であり、食行の考える世界の創世神話や世界のあり方、「みろくの御世」等について記述されている(大谷 一九九六)。「一字不説の巻」は富士講や不二道等といった食行の後裔を称する諸集団には少なからぬ写本が伝えられているものである。食行によって付されたタイトルは『一字不

説お開身祿の御世の訳お書置申候』である。「一字不説の巻」は、食行による本文と、吉田(山梨県富士吉田市上吉田)の御師である田辺和泉と大幣司屋(田辺伊賀)による序文からなる。「一字不説の巻」の写本にはこの田辺による序文が付されているため、序文のタイトルである「一字おひらき御礼申上候」が『一字不説の巻』の正式なタイトルとして流通している。

『不二道開伝一字開御礼奉申上候』の内容としては前後半に分けるとができる。前半は、「一」「二」「三」といった漢字の読み方からその文字に様々な意味を与えるものである。例えば、「一」なら「ひと」すなわち「人」を示すといひ、「二」を○で囲み、「ひと」「まる」すなわち「火止まる」などといったように、である。また、本橋家に伝わる諸本の前半部分に共通するものとしては、「四肢胃伝」がある。「四肢胃伝」は不二道に伝えられる表現で、「ししいでん」の音は「紫宸殿」を指し、「胃」の字から四方に伸びる「四肢」は土農工商を示す。すなわち「紫宸殿」天皇」を中心として全ての民がその周りに配される様子を示したものであるという。後半は『一字不説の巻』からの抜き書きである。どの一言一句にも本橋源兵衛が朱字にて加えた注が付されている。

大谷正幸は、東京都内に現在も続く富士講の先達にその講に伝わる『一字不説の巻』を読んだことがあるか直接尋ねたことがあるといひ、その回答は否だったという(大谷 二〇〇〇)。岩科小一郎は「(前略)『一字不説の巻』を持つている人は少ない。読んで信徒に伝える話題を引き出せないからであろう」(岩科 一九八四)と述べており、食行が『一字不説の巻』を著した後、どれほどの年月が経過してからの傾向であるかは不明だが、富士講ではこれを読むことはまずなされていなかったようである。

そうした状況を背景に、しかし本資料が『一字不説の巻』の内容理解と浸透を目的としたものであることは間違いない。本資料を参照すると分かるが、かなり自由なレイアウトで構成されており、書き込み文字のサイズもまちまちである。実際に出版するにあたりこれを整理したもの

が『不二道一字開説』と考えられる。いずれも、図解や注、『一字不説の巻』からのフリーズの抜き書き等によって構成されていて、「本橋好家文書」に残されているどの類似資料にも、文章らしい文章というべきものがほとんどないのである。つまり、これだけを頒布し、新曾とその周辺の富士講のメンバーやその他の読者が通読して何かを理解するというものでもなかったのではないだろうか。手書きで写したものの、あるいは版本として印刷製本したものを講のメンバーに配布し、月の拝みやその他メンバーが集まる機会にこれを参照して本橋源兵衛やその他の人物による講話等によって『一字不説の巻』の内容を理解する、といった講義用のレジュメのような役割を持っていたのではないか。推測の域を出ないが、筆者はこれを可能性の一つとして考えている。富士講において『一字不説の巻』をこのように使った、あるいは使った可能性のある事例を筆者は知らない。本橋源兵衛と彼の仲間たちは、富士講として月拝み等をしつつ、不二道のように書き学ぶ行為にも重きを置く、村の富士講としては極めてユニークな活動を展開していたのではないだろうか。

【おわりに】

本稿では『不二道開伝一字開御礼奉申上候』を紹介するにとどめ、版本としての『不二道一字開説』の出版、その直接の原稿となったと思われる手書きの本橋好家文書番号五五『不二道一字開説』と、文書番号五七番『不二道一定開説』、その他の諸資料の紹介と内容の検討については稿を改めたい。それらの検討によって、本橋源兵衛の信仰の形成や、新曾地域、あるいはさらに広い地域における本橋源兵衛と彼の仲間たちの富士信仰の位置づけ等を明らかにできると筆者は考える。

本橋源兵衛は、富士講と不二道、明治時代になってからは扶桑教と、それぞれの用語や概念、人的交流を自由に行き来し、その教えを抜き書きしたものを配布し発行した。彼と新曾あるいは戸田市域の富士信仰の活動実態については、今後さらに詳細な考察を進めていきたい。

本稿の執筆に当たり、資料所蔵者である本橋三幸氏ご夫妻に多大なご協力をいただいた。また、富士信仰研究者の大谷正幸氏には多くの示唆に富むご指摘をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。

【翻刻】

・本稿は本橋三幸氏（埼玉県戸田市）所蔵の『不二道開伝一字開御礼奉申上候』を翻刻したものである。
・翻刻に際しては、読みやすさを考慮し基本的に万葉仮名を平仮名に改めている。ただし、ハ、ミ、などは片仮名のまま翻じ、漢字は原本の表記になるべく近い字体を採用した。

・原本がかなり自由なレイアウトで構成されており、翻刻にあたっても原本のレイアウトを再現することを試みた。そのため、紀要見開きの奇数頁に原本の影印を、偶数頁に翻刻を配し、原本と翻刻を対照できるようにした。

・原本は墨と朱によって書き分けられており、翻刻では朱で書かれた文字を網掛けで示した。

・影印には戸田市アーカイブズ・センター所蔵マイクロフィルム「本橋好家文書」のうち「1*6000-1*604」を使用した。これは、戸田市史編さん室により『戸田市史』編さん事業において撮影されたものであり、現在、戸田市立郷土博物館内戸田市アーカイブズ・センターにて閲覧することが可能である。

【参考文献】

戸田市教育委員会編 一九八五『戸田市の寺社』戸田市教育委員会
戸田市史編さん室編 一九七七『市史調査報告書第3集 戸田市諸家所蔵文書目録2』戸田市

戸田市編 一九八三『戸田市史 民俗編』戸田市

岩科小一郎 一九八四『江戸の富士講 江戸庶民の山岳信仰』名著出版

大谷正幸 二〇〇四『富士信仰から角行系宗教へ―彼らは「新宗教」か否か―』『宗教研究』第七八巻第一号 日本宗教学会

大谷正幸 一九九六『食行身縁と「二字不説の巻」をめぐる』『宗教研究』第七〇巻第二号 日本宗教学会

大谷正幸 二〇〇〇『「二字不説の巻」第三段の読解とその問題点』『仏教文化学会紀要』第九号 仏教文化学会

大谷正幸 二〇〇一『「二字不説の巻」のタイトルと序文』『仏教文化学会紀要』第一〇号 仏教文化学会

大谷正幸 二〇〇九『富士信仰のある写本と月行作「直相の巻」』『仏教文化学会紀要』第一七号 仏教文化学会

大谷正幸 二〇一〇『角行系富士信仰 独創と盛衰の宗教』岩田書院

大谷正幸 二〇一〇『角行系富士信仰と倫理道徳』『仏教文化学会紀要』第一九号 仏教文化学会

岡田博 一九八二『小谷三志をめぐる人々 その八・伊藤かつ女』『郷土はとがや』第十号記念特集号 鳩ヶ谷郷土史会

岡田博 二〇〇三『鳩ヶ谷宛 岩科小一郎先生書翰再読 その二―弟子を育てる名人との二十年―』『富士信仰研究』第四号 富士信仰研究会

1 現在は同家の現当主である本橋三幸氏の所蔵である。

2 本橋家には『不二道一字開説』の版本は伝えられていないが、『出版御届』と題された資料が三点伝えられている。いずれも同じ内容の資料で、『不二道一字開説』の出版許可を届ける内容となっている（戸田市史編さん 一九七七）。明治十二年七月二十五日の日付を持つこれらの資料によれば、『不二道一字開説』は明治十二年八月二十日の出版である。

3 大谷は現在これらを角行系宗教ではなく角行系富士信仰と呼んでいる。

4 「二重丸に三の紋」あるいはもう一つの石造物の「二重丸に三」は極

端にデフォルメされた上向きの三日月の中に「三」の字が描かれたもので、本橋源兵衛と彼の仲間が属した月三講の紋章である。これについては、今井功一「埼玉県戸田市の新曾浅間社と山開き」『埼玉民俗』第三九号、埼玉民俗の会、二〇一四）においても触れている。

5 『戸田市史』では富士講と不二道は区別されずに記述されている。確かに不二道は富士講から派生したが、明確に区別して論じるべきものである。

6 岡田はここで二度、『不二道一字開説』らしい書名を挙げており、一度は「不二道一字開巻」、もう一度は「不二道一字開の説」となっている。また、岡田（二〇〇三）は同一の資料を『不二道一字開』とも記載している。これらのうち、『不二道一字開の説』という表題を付された資料は、戸田市内の小山岩次郎家に所蔵されていたことが同じく戸田市史編さん室（一九七七）によって明らかになっている。残念ながら現在ではその所在が確認されていない。明治十二年九月の日付があるもので、前述の「出版御届」で届けられた『不二道一字開説』の出版年である明治十二年九月二十日と若干の齟齬がある。なお、『不二道開傳』と題された資料も同家には所蔵されていたらしいことも『戸田市諸家所蔵文書目録』から分かっている。こちらは明治十年八月十五日の日付が記されている版本である。類似した署名を持つ複数の版本の存在がうかがわれるが、筆者はこれらについて現時点で未見である。これらと本稿で紹介した資料との関連については今後調査すべき課題である。

7 富士講以外では参行六王が「二字不説の巻」の読むべきポイントについて書き出したものが知られている。